春燈

二月号

2

February 2008

久保田万太郎の句

寒凪のたまくかすみわたりけり

「春燈」昭和二十九年

「城先生、芸術院に入る」の佳き知らせに詠まれた句。若き日の万太郎は、東洋城の仮寓望遠館に熱心に通い、句の基礎を固めた由。若き日の師を想いつつ喜びの心境を表し、「かすみけり」ではなく、「かすみわたりけり」で、無限の喜びの広さ、深さを思わせてくれる。〈俳諧は寒き事ぞと教へしが〉の東洋城の句に何か秘密と影がありそうである。東洋城に特にこだわりをもつ私。

加藤良子

PDF= 俳誌の salon

成瀬櫻桃子の句

豆の花海にいろなき日なりけり

句集『春燈抄』昭和二十二年・木曜書房版

掲句は赤瓦帖（昭和二十一年一月～四月）七十八句にある一句である。万太郎は昭和二十年五月に鎌倉材木座へ転居している。句集後記に「不測の運命に導かれての生活、ゆめにも思はなかった田舎住ひ、松風にあけ、波の音に暮れる海のほとりでのあけくれ」と鎌倉での生活を述べている。末尾に同年一月に創刊した「春燈」へ感謝を込めて句集に『春燈抄』と名づけたとある。

栗原完爾

PDF= 俳誌の salon

西ケ原日記
（39）

鈴木榮子

去年今年隣人すでに四十年

初髪を幾とせ予約せしならむ

弓始め上庭弓道練習場

お飾りを掛けて事務室五〇一

細工始め下げ緒あれこれ取替へて

PDF= 俳誌の salon

初電話受けて今年のいの一番

初出勤捺印朱に出勤簿

初星の面を上ぐる度額に

宴の後淑気を未だ身に纏ひ

初明り東の方に家の建ち

寒海苔のこの漆黒の黒々し

松過ぎの普段に返る日常時

PDF= 俳誌の salon

特別作品（抄）

稲の風

桂林の奇峰三遠秋かすみ
雁渡し桃源郷へ続く橋
篆刻の帰去来の碑や虫すだく
洗濯場は竹筏（ツイバイ）寄せ場赤とんぼ
円卓に大き月餅良夜かな
道に席しつらへ酒を酌む夜長
大鍋をはみ出す炎望の夜
稜線のなべて棚田や天高し
天梯の棚田を登る稲の風
豊の秋棚田築きし八百年

小泉三枝

PDF= 俳誌の salon

特別作品（抄）

日本語学校一年

宮崎裕子

新学期初級教材嵩なせる
壁に貼る五十音図や春日ざし
「あいうえお」分からぬ一人雀の子
青い眼の「漢字ムリムリ」しやぼん玉
読み書き会話順調夏に入る
アマリリス首位を譲らぬ紅一点
居眠りの学生に喝日雷
休暇明け香料強き韓の菓子
故郷を恋ふる草笛ビブラート
母国語の生気飛び交ふ運動会

PDF= 俳誌の salon

当月集

鈴木　榮子選

○　横田初美

鰯干場に畑のもの乾す小六月
逃げごしの日を追うてゆく冬の耕
指揮棒に声をあつめて十二月
地卵の黄の花ちらす風邪の粥
鍋の湯気ゆたにふたりのクリスマス

○　島田山流

大仰な手拍子恥ぢるちび熊手
冬浅し薄着自慢の若作り
小春日の秒針命を刻む音
湯豆腐や悌偲ぶ陰の箸
空つ風筑波跨いで銚子沖

○　佐々木新

行く秋や鬼無里に独りそば啜る
牧帰り空に居残る昼の月
後の月とらへし湖の蒼さかな
小春日や水沸々とぐたり沼(東八甲田)
大マシュマロむくり白鳥の目覚め

○　金子輝

出しぬけに汽笛一湾冬兆す
巴里の子の帰る報せや大根煮る
嵩高の薬小分けに日短か
花八手休診札の褪せにけり
紅顔の衒ひしことも闇夜汁

○　松波とよ子

菊薫る坐像の勢至菩薩かな
広重の美人の項冬袷
寒山拾得掃きても尽きぬ落葉かな
邪鬼支ふ巨き香炉や落葉寄る
荒北風や泰然自若鬼瓦

PDF= 俳誌の salon

春燈の句

鈴木　榮子選

冬ざれや先の不安の増すばかり　東京　馬場　宏一
鯛焼を土産にのぞくアルマーニ
聖樹灯り神よいづこにおはします
寄鍋やわれは老愚者君いかが
ふるさとより届く泥葱泥大根
児の作るカレー勤労感謝の日
一茶忌やへのへのもへじの「じ」の勢　東京　宮沢　治子
鎌倉や塀を越えたる柚子の金
真砂女掃きし銀杏落葉の稲荷かな
嘶家の陽気な離婚神無月
憂国忌決着つかぬ派兵論　埼玉　鈴木　撫足
築三十年婚四十年の隙間風
露霜や夜は聞こえ来る山の音
眉月や漆黒の山眠らせて　千葉　中嶋　昌子
面とれば鬼も馴染や里神楽
黄落の中少女らは鳥になる
針山の針をかぞへて了ふ夜業　兵庫　和田　絢子
新米炊く熟知の水の加減かな

柿熟るるを鵯まつさきに告げにけり
妊りし時の懐かし柘榴食む
紅葉見て明くれば雪や山の宿　茨城　廣澤　成美
大内宿の藁葺き屋根や吊し柿
藁葺きの暮し厳しき氷柱かな
夫の介護時に重荷や寒昴
肩書がとれて身軽の小春かな　茨城　君塚　敦二
冬雲雀敦のはらひ長し長し
暇ありて人を訪ふなり小六月
子のことは他力本願冬日向
緑青の木の葉息づく古屏風　東京　後藤眞由美
日だまりに寄り来て孤独冬の虫
青白き電飾聖し冬館
冬薔薇モダン好みし父の忌来
代名詞続く会話やぬくき冬　茨城　小林　峰月
冬紅葉日の色返す道祖神
庭師らの口手八丁年の暮
寒の空重たく閉ざし嶺くらし

PDF= 俳誌の salon

余　言

鈴木　榮子

ゾーリンゲンの鋏よく切れ黄落期　　北岸　邸子

ゾーリンゲンはドイツ西部の工業都市で刃物の製造で世界的に有名。かねがねゾーリンゲンのあの形あの鋏で爪を切りたいと思っていたが、思い切って今夏買った。爪に合せたアールが気持よい。

ところで、女性は爪を切るのではなく鑢で削るとの事なので事務所の近くのネールサロンに寄って見た。こちらの爪も伸びてもいなかったが確かに鑢で削っていた。その後の伸び方も控えめだ。さて次回どうしょう。削って貰うならゾーリンゲンは不要なのか。作者もゾーリンゲンを買ったからにはわが爪も愛しく、丁寧に心たのしく使っているのであろう。

前山に木樵の谺冬ざるる　　森澤とほる

作者はいま羨ましいような山中のロッジにでも滞在されておられて、山の静寂を一身に感じておられるのだろう。

それはどこと限定しないでもよい。外を見ると前山はすぐそばには迫っていないが視線の中にある。木樵という木を伐ることを職業とする人の伐りおえた木が豪快に倒れるべき地にかり出されたのであろう。その倒木の音は一とき山の静寂を破って前山より餌となって地響と共に伝わってくる。冬の山川、谷の荒れさびたさまは冬そのものであるが、作者は冬ざれにこそ癒されるのであろう。やがて必ず春の美しい芽吹きがあることを信じて。

小さき旅適ひたる身や冬ぬくし　　徳永　辰雄

作者の適いたる旅は何処だったのかと気になったが一緒に投句された富士を見たいという船旅が実現出来たのだ。

PDF= 俳誌の salon

旅はゆく前に楽しめて、その途上はピークで、帰って来ればまた思い出が楽しい。

〈師走富士見たさに逸る船の旅　徳永辰雄〉私達も願えば適うことを共に信じよう。

江知勝は牛鍋の店湯島の灯　　高木　曽精

江知勝は湯島の切通しの途中に広々と間口を構えて、店を張っている。明治の文豪達がよく訪れた店である。よく文章の中に出て来るが、私など心に掛けているほど利用されているとは思えない。上野の美術関係者や東大関係者の使い方が足りないのでは―と僻むのはおかしいけれど、作者も美校出の画家の先生であるから江知勝を学生時代もその後も贔屓になさっておられるのであらう。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon